

毎朝、私はバスで通勤していますが、保育所がすぐそばにあるバス停で、子どもと一緒に降りる若い男性を見かけることが多くなりました。また、「早く帰宅する方が夕食をつくります」と話すカップルも珍しくなくなりました。家事・育児に積極的に関わっている男性が増えていくことを実感します。しかし、それは、まだ統計データから読み取れるほどの変化ではありません。「平成18年社会生活基本調査」によると、共働きの夫婦でも、育児介護・買物も含めて、妻は一日平均4時間15分家事をしているのに対して、夫はわずか30分です。そもそも、夫が働いている妻のうち42%が専業主婦である（平成21年労働力調査）ことからしても、「夫は仕事、妻は家事」という伝統的な男女の役割分担が根強いことがわかります。

## 伝統的な男女の役割分担

最近の経済学では人々が合理的には行動しないことを前提

にさまざまな社会現象を説明しようとしています。これまでの経済学は、人々が合理的に行動する結果としてさまざまな社会現象が生じると考えてきました。伝統的な男女の役割分担が根強いことも人々の合理的な行動の結果だと考えます。その一つが「比較優位」という考え方は、1つの財の生産に特化し、それらを貿易を通じて交換するほうが、2つの国ともより多く消費できるという貿易理論です。経済学はこの理論を伝統的な男女の役割分担の説明に応用しました。

たとえば、1時間働いて手に入る賃金を、男性は2000円、女性は1000円だとします。一方、1時間家事をすることの価値をお金に換算すると男性は1000円、女性2000円だとします。男女間賃金格差が存在すること、女性のほうが家事は上手であることを前提にした議論です。この2人が一緒に暮らし始めて、かりに200

# 経済学で考える



●同志社大学社会学部産業関係学科教授

## 富田 安信 とみた・やすのぶ

1953年香川県生まれ。大阪大学経済学部卒業。大阪府立大学経済学部教授を経て、2006年より現職。2009年1月からIMF-JC労働リーダーシップコースの運営委員としてゼミを担当。主な論文：「女性が活躍する職場づくりとは」（同志社大学社会学部産業関係学科編『“働く”を学ぼう 仕事と社会を考える』人文書院 2011年3月）、「職場における男女平等」、「雇用形態の多様化」（久本憲夫・玉井金五編『ワーク・ライフ・バランスと社会政策』法律文化社 2008年）他多数。

0円分の家事をしなければならぬとき、どちらが家事をしたらほうが合理的でしょうか。ここで放棄収入という考え方が重要です。男性が2000円分の家事をするためには2時間かかります。そのためには働く時間を2時間減らさねばならず、賃金収入を4000円放棄しなければなりません。一方、女性が2000円分の家事をするには1時間でよく、そのために放棄しなればならない賃金収入も1000円で済みます。とすると、家事のために放棄する賃金収入が少ない女性が家事をする

ことが経済合理的になります。ここまでの議論、納得していただけでしょか。

さて、職場における男女平等が実現し、女性の賃金も男性と同じく1時間2000円になつたとしましょう。家事をするのは男女どちらでしょうか。ここでも2000円分の家事をするときの放棄収入を考えましょう。女性の賃金も2000円になりましたので、2000円分の家事をするための放棄収入は2000円になります。でも男性の放棄収入は4000円のままで、やはり女性が家事をす

# SQUARE

るほうが経済合理的です。重要なことは、職場における男女平等が実現しても、女性のほうが家事は上手であるという現実が変わらないかぎり、伝統的な男女の役割分担は変わりません。もう一步、議論を進めます。女性が職場で能力を発揮して、1時間の賃金が3000円と男性より稼ぐようになったとしましょう。家事をしても女性が上手、働いても女性の賃金のほうが高い。男性は取り柄がありません。このとき、どちらが家事をするほうが合理的でしょうか。

ここでも放棄収入を比較します。女性が2000円分の家事をす

るために放棄する賃金収入は3000円になりましたが、それでも男性の放棄収入4000円よりまだ少ないのです。つまり、女性のほうが賃金は高いのに、やはり女性が家事をするのが合理的になります。

## 男性の家事能力を高める

みなさんはこれまでの説明のどこに違和感をお持ちしたか。

「夫は仕事、妻は家事」という伝統的な男女の役割分担の利点を強調してきましたが、こうした経済学的な考え方に対する批判もたくさんあります。ここでは3つ紹介しましょう。1つめは、家事といってもその中身はさまざまであり、女性が得意な家事もあれば、男性が得意な家事もあるということです。そもそも家事能力については男女に差がないと考えたほうがいいのかもありません。「比較優位」の前提の一つが崩れます。最近では、家事が得意な男性も増えていきます。男性の家事能力が高まって、家庭における男女平等が実現す

# 「夫は仕事、妻は家事」を

ればいいのですが、家事が苦手な女性も増えているようです。女性の家事能力が低下して、家庭における男女平等が実現するというのでは少し残念な気がしますが。

2つめは、家事をする時間そのものの楽しさや苦痛を考慮してこなかったことです。家事を少しするだけなら楽しみでも、家事に費やす時間が長くなればなるほど家事は苦痛になります。たとえば、週1回食事をつくるくらいであれば、いい気分転換にもなり楽しみかもしれません。ところが、毎日毎日食事をつくるとなると、しだいに苦痛になってくる人も多いと思います。そんなとき、週1、2回、夫が食事をつくるようになれば、夫も楽しみの範囲内、妻も毎日食事をつくる苦痛から解放され、夫婦の生活満足度は高まることを考えられます。ただ、夫に家事をしてもらおうと、逆に妻の家事が増えてしまうという話も聞きます。そうならないように、夫の家事能力を高めるための訓練も必要でしょう。

3つめは、夫は家事を妻に任せっぱなし、妻は働かずに経済的に100%夫に依存している状況は夫婦それぞれにとってリスクが高いということです。とくに女性にとりてリスクは高いと思います。たとえば、ずっと専業主婦だった女性が、不幸にして夫と離死別したときのことを考えて下さい。そうした女性が働き始めたとしても低賃金の仕事しか見つからず、子どもがいる場合など、家族の生活を支えるのが難しくなっています。離死別によって生じる経済的リスクを考えると、女性にとって結婚・出産後も働き続けることが必要です。男性の場合も、たとえば妻が病気になるなど、家庭のリスクに備えるためにも、ちゃんと家事ができることが必要です。

男女共同参画社会を実現するために、ひよっとすると、男性の家事能力向上がポイントになるかもしれません。そのあたりを見据えた労働組合の取り組みも必要になってきそうです。